

まっつて、誰の墓標かわからなくなつてしまふのである。

入ソ以来、私たちは人間扱いでなく、動物の扱いであつた。冬期は雪の中の作業、一部石炭掘り作業、夜中はツララの下がる幕舎の中の生活。食事は朝昼夜一回一品食だけ、飯盒一杯を三人で分け合つての生活であつた。突然私たちは栄養失調（肛門が天井を向く）状態者百人、六月初旬ラーゲルを出発、ダモイ、舞鶴港に上陸したのである。港の段々畑には、真黄色い麦が美しく実つていた。ああ、これで夢にも見られなかつた祖国の港に入つたのである。感無量であつた。私たちは死んでも共產主義者にはならない決心である。

ソ連沿海州「アクール収容所」の

「忘れ得ぬ記憶」

新潟県 三重堀 芳三

昭和二十年十月一日、中千島より入ソ、着いた港は沿海州の「ソフガワニ港」。その後、種々作業をしたが、約

二年間過ぎた。約百五十キロメートルも北方の奥だと思われる「アクール収容所」にやらされた。今回はその中の飢餓、生活の極限の状況の一部を述べてみる。

一日の作業が終了し、今、生活の中で何よりも一番楽しいこと、それは夕食である。これは「チト小さいじゃないか」、これは「皮ばかり」、これは「一寸軽いヨ」、目の色を変えての言い合ひだ。それはたった一人当たり百五十グラムの黒パンを、手製の「天秤計り」で分配している俺たちの集まりの言葉である。

そして分配したパンを今度はクジ引で受け取るのである。主食はそれしかないから、みなは真剣なのだ。ちようどわからず屋の子供と同じ「餓鬼」とでも言うか、みなは腹が減つて仕方がないのである。それと、副食として大豆と綿羊の内臓（もつ）と岩塩とを味付けしたのも、それが「豆のスープ」とでも言うか、汁の方の多いものであつた。量は飯盒の中盒に入る量である。

そして、このようなきままつた献立が一日三度とも同じで、三か月以上も続いた。それが嫌いだとしたら食べ物が無い。その糧秣（大豆）が終わると、また同じ物がく

るか、またはそのかわりの「小豆」がくることがある。やはり品物が変わるといふことはうれしかった。

そして、その後待っているのは厳しい作業だ。俺たちが来る前に、新規鉄道が荒削りで敷設してあったのを、日本人の手による仕上げ工事だ。土木工事、砂利敷き整備等、毎日ノルマ（一日の作業量）のついた過酷な重労働だった。

冬期の状況をちょっと述べてみると、九月ともなると日本の晩秋とでも言うか、霜が降りたり、九月末になると水たまりは薄氷が張る。十月には気温が零下となり、雪も水気のない乾燥した粉雪となり、手で握っても丸く固まらないで、ばらばらになってしまふ。十一月ともなれば、毎日最高気温が零下十七度くらいで、完全に冬である。十二月からは常時零下三十五度か四十度の物凄い酷寒である。

次に思い出として頭にこびりついているが、空腹でたまらない日が常時続いているので、同僚の者が昼間の作業のソクホーズ（国営農場）、コルホーズ（共同組合農場）で働いていて、作業場の裏に捨てられてある馬鈴薯

の山、日本ならとうに腐ってしまはずなのに、それが日本と違って気候が零下なものだから、薯が腐らないで、長い期間の後に、他の成分が分解してなくなり、澱粉のみが積んであるようになっていて。黙って持っているとおこられるものだから、内緒で拾ってきて、よく洗って飯盒で水で煮つめて、水分がなくなると容器に移し、棒で突き固めると、ちょうど澱粉ダンゴとなる。

みなは小躍りして喜んだものだ。そのうまいこと、こんなにうまいものが世間にあるのかと思われた。それはいくらか空腹がおさまるといふもの。あまりおいしいのでこの「ダンゴ」の名前を「ヨツポイ薯」と名づけた。ソ連語で「ヨツポイマーチ」馬鹿野郎である。その名前からとったものだ。今ではとつても食べられるような味ではないと思う。

もう一つ申し述べてみると、夜、暗い所でヒソヒソ話をしているものがいた。それは同僚が万年筆と黒パン一キログラムをソ連の人と交換しているのである。これはうまかったと、そのパンをソーッと持ってきて、声をひそめてベッドの回りの人数で分けて空腹をいやした。

自分もそれならばということで、兵隊に入隊するとき
に持ってきた腕時計が、ホコリや汗で掃除をしないから
動かなくなっているのに、別に惜しくもなく、どうでも
よいのである。それとパンと換えることにした。ソ連で
は腕時計や万年筆を一般には持っていないようである。
だから、動かない時計でも喜んで応ずるのである。持っ
てきたのは、やはり四キログラムの黒パンである。また
みなで分け合って食べた。そして食べながらの話題の中
で出るのは、必ず食物の話である。「母チャンのこしら
いたポタ餅、うまかったなア。日本に帰ったら、ポタ餅
つくったら、案内するから、来いよなア」等、言うこと
はいつも同じである。

またノルマに追われてクタクタになって、仕事が終わ
り、収容所に帰って、夕食も終わり、いよいよ夜九時こ
ろの就寝である。(ただし腕時計がないからわからない)
外は物凄く寒さだから、部屋の中は薪たきストーブがド
ンドン燃されるので暖かい。ただし、換気設備が不完
全のため、二段ベッドの上部は暖か過ぎて「暑い」と怒
鳴る。下部ベッドはそれほどでもない。

夜中のトイレは外の他棟にあるため、それも明け放し
の上家式である。気温零下三十度であるので、部屋の中
でズボンと袴下の紐をとぎ、すぐおろせる準備をして出
て行って、二、三分で用を済ませないと尻が凍ってしま
う。二、三分でも腹部は冷え切っている。だから、ス
トープの周りに立って、三十分くらいも暖まってから寝
なければならぬ。だから、一回トイレに起きると、四
十分もしないと寝られないのである。極端なときは四、
五回もトイレに起きると、一晚中寝られないときもあ
る。下痢でもしたらなおさらである。

もう一つつけ加えると、その上家式トイレは二本橋方
式で、地盤から立方体型に深さ一、二メートルくらい
掘った土だけの便槽の上に落葉松の丸太を橋渡し、真ん
中だけ二十五センチメートルくらいのアキを取り、個々
の仕切りがないのである。だから、前の人の尻が丸見え
である。そして尻拭きの紙もないから、作業に行く途中
で衣類の布切れ、南京袋の布切れ等、なんでも拾ってき
て紙がわりにした。これはどうにもならないから、みな
は慢性になって、あきらめてしまった。

「餓鬼道」と「極寒」、生きるためのギリギリの生活。そして畜生同様にこき使う強制労働。生き地獄の想いの抑留だった。

抑留生活とところどころ

新潟県 石川 卓

八月十五日、擇捉島山中に道路構築中、一人の伝令手によって戦争終了を知った。三角兵舎世屋根の下で、青春の男たちがでっかい悔し涙で抱き合う。ソ連軍進駐九月初旬、直ちに我等は下山、天寧飛行場に各部隊集結、乗船のため、これより敗戦の実感が始まる。

昼夕食ともカンパン少量、塩気が全然ない。飲みたい水も自由に求められず、ときどき威嚇射撃で我等をおどす。一夜明けてソ連船に乗船、南下の進路をとる。故郷の山河を脳裡に描きながら着いた所は樺太大泊港、将校はここで帯刀を引き揚げられる。

船はまたもや東京ダモイのたまされ言葉で出帆、今度

は一路沿海州を北上、また一夜明けて、日に映った所はまぎれもなくシベリア流刑地。埠頭には四十車両余の二階建て貨車。これは本国より囚人輸送専用列車であった。

我等もこれに乗る。大隊長の訓辞では、一か月の長旅になるから、寒さに十分注意とのこと。そのとき直感したのがモスコウ郊外で要塞構築でもやるのかな、完成すれば必殺間違いなしと、一瞬にして背筋に氷が入った思いとなる。

列車は夜通し走った。急の坂は一遍で登りきれず、何回も繰り返す機関車は、当時薪をたく。翌日午前下車、一か月の長旅とは全くのうらはら、ここが我等の第一任地となる。まだ九月半ば前だが、朝霜柱でザクザク、兵舎は馬小屋を改築したものらしい。もちろん電灯等はなく飲み水もない。

作業は主に伐採で、機関車にたく薪専用。夕食の分配は松ヤニをともして明かりとする。朝起きても洗顔の水もなし。幾日も経つうちに目ばかりがぱちくりぱちくり、戦友の顔がだれかれの判断がつかないくらい。作業